

梅雨時期は大雨による農作物の管理徹底を！

6月5日に東北南部が梅雨入りし、平年より7日、昨年より10日早く梅雨入りしております。梅雨時期は大雨による災害が発生しやすい時期ですので、きめ細かく圃場を見回り排水対策を講じて下さい。水稻の生育状況については田植え後、約1か月半が経過しており、現在のところいもち病や初期害虫の発生はほとんど見受けられず良好です。概ねの水田では有効茎を確保しておりますが、葉色が淡くなっている圃場も一部見受けられますので、元肥を考慮し淡く茎数が少ない場合は追肥の施用を検討してください。

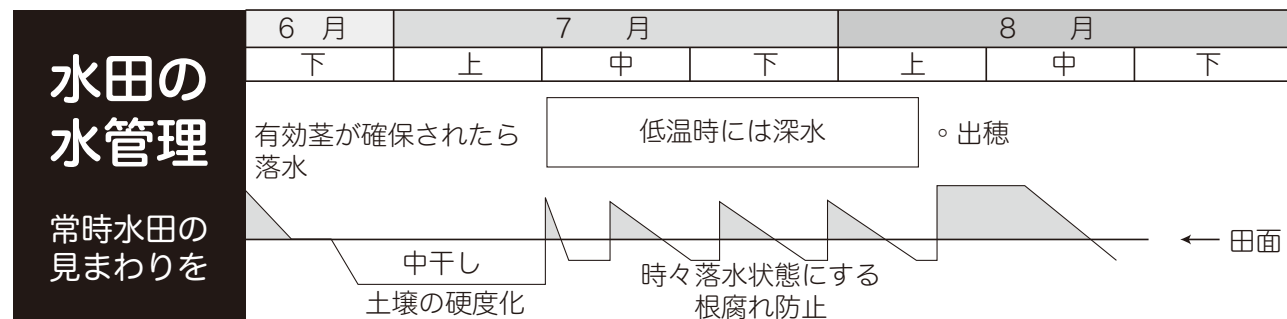
稲作講座の開催について

平成26年産米の収量・品質向上を図るため下記の通り講座を開催致しますので、繰合せ参加いただきますようご案内致します。

- 開催日時 平成26年7月15日（火）午前10時00分～11時30分
- 開催場所 JA名取岩沼 本店3階 大会議室
- 講座内容 ①水稻の生育経過と今後の肥培管理について
講師 亘理農業改良普及センター
②米穀情勢と平成26年産米の販売について
講師 全農みやぎ 米穀部

※環境保全米を栽培している生産者は是非参加下さい。

◎水田の水管理と生育ステージについて



◎畦畔・農道等の草刈作業の実施について

病害虫発生の原因になりますので、早めの草刈を実施しましょう。昨年、斑点米カメムシ被害が発生した圃場は特に草刈作業を出穂10日前までに完了してください。

◎水稻の中干し管理について

<中干しの目的と効果>

- 水を切ることにより生育を抑え、茎数過多を防ぎます。葉の垂れを防ぎ、光が株内によく入るようにします。また下位節間の伸長を抑え、倒伏しにくい稲に仕上げます。
- 土壌中に酸素を供給し、還元状態で生成される有害成分（二価鉄、硫化水素、有機酸）を除去して、根を活性化させます。
- 機械作業に適した土壌硬度を確保します。この時期に一度しっかり干すことで、収穫直前の落水でも容易に田面が硬くなり、機械作業がスムーズに行えます。

<中干しの開始>

一般には田植えから約45日程すると中干しの時期です。正確には、田に入って中庸な生育の地点で茎数を数え、2葉以上ある茎が平均して約20本になったら中干しを開始します。

<中干しの程度>

- 茎数の多い、葉色の濃い、排水の悪い、粘土質の田は、土面に1～2cmの割れ目が出来るまで干し、このままの状態を保ちます。
極端に乾いて日中葉が巻くようであれば、いったん走り水をして再び干し、これを繰り返します。
- 茎数の少ない、葉色の淡い、水保ちの悪い、砂質土の田は、土面に細かい割れ目が現れるまで干し、間断灌水を繰り返します。

<中干しの終了>

中干し期間は一般に2週間程度を標準としますが、生育の寂しい稲は期間を短く、過繁茂生育の稲は長く行います。以上のようにして、中干し終了後に1株20本の太い茎を残すことを目標に水管理を調節します。

出穂の25日前以降の水不足は穂の発育に影響が出るので、遅くともこの時期には中干しを終了して入水します。一度に灌水状態にすると、酸化状態にあった根が、急激な酸素不足により根腐れする場合がありますので2～3回走り水をした後灌水しましょう。

<中干し後の水管理>

幼穂形成期から穂揃い期までは浅水管理、穂揃い期以降は7～10日浅水管理後、1～2日落水管理の間断灌水が理想です。

(注)除塩後の水田では、塩分濃度が上昇する事が想定され根に障害が発生するため、原則として中干しは行わないようにしてください。根に酸素を供給したい場合は、飽水管理（足あとに水が残る程度の水分を保った細やかな水管理）で対応してください。

◎追肥の施用について

●**幼穂形成期の追肥**は…穂の粒数を確保するための効果があります。

散布時期……………7月上～中旬に施用。

- 通常栽培の場合は、出穂前20日～25日前頃に窒素成分で「1kg」の追肥が目安です。
ひとめぼれ……窒素成分で「1kg」。まなむすめ……窒素成分で「1～2kg」を基本に施用。
ササニシキ……幼穂形成期には原則行わない。

●**減数分裂期の追肥**は…穂の粒数減少防止、千重粒の増加に効果があります。

散布時期……………7月中～下旬に施用。

- 通常栽培の場合は、出穂前10日～15日前頃が目安です。
ひとめぼれ……窒素成分で「1kg」。ササニシキ……窒素成分で「1～1.5kg」。

●**追肥の肥料**……………NK化成C68号の場合。現物量6～7kg/10a＝窒素成分「約1kg」基準に施用。

※**環境保全米栽培は、基肥の化学窒素施用量を必ず確認してから追肥を実施すること。**

〈例〉基肥に、「まーくん有機209」を40kg施肥で化学窒素の窒素成分が「**2.4kg**」となりますので、追肥の化学窒素の窒素成分は「**1kg**」以下であれば施用が可能です。(NK化成の窒素成分C68号であれば現物量5kg以内)

※**追肥の判断についてJAでは葉緑素計を準備しております。圃場に出向き診断しますので、ご連絡下さい。(営農企画課 022-384-2392)**

◎いもち病の防除について（7月中旬散布）

●箱処理剤を使用した場合

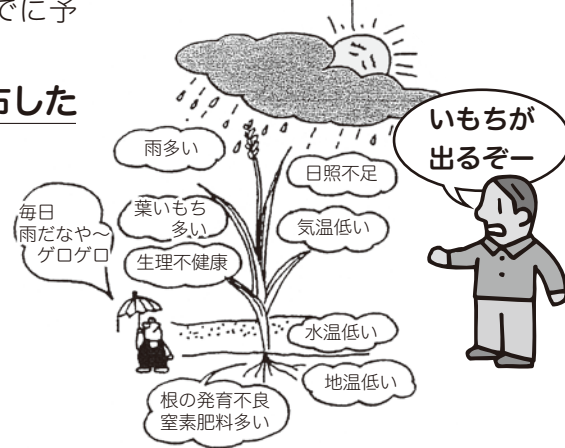
箱処理剤は長期残効型の薬剤ですが、7月中～下旬にかけて薬効が低下してきますので、出穂予想日から10日前までに予防散布するようにしましょう。

※箱処理剤を使用せず、本田でオリゼメート剤を散布した場合は、必ずコラトップ剤を散布して下さい。

＜いずれか1剤を散布する＞ 7月15～20日頃散布
 コラトップ粒剤5（10a当り 3～4kg）
 コラトップ1キロ粒剤12（10a当り 1～1.5kg）
 コラトップジャンボ（10a当り 500～650g）
 ※パック剤（小袋 10～13個散布）

（注）環境保全米はコラトップ剤を使用できませんので、ご注意ください。

いもち病の発生条件は？



◎倒伏軽減剤の散布について

葉色が他の水田より濃く、畝間が重なり、葉が垂れているような圃場では、倒伏が懸念されますので倒伏軽減剤の使用を検討して下さい。

薬剤名	使用目的	使用量	使用時期	使用方法
ロミカ粒剤	節間短縮による倒伏軽減	2～3kg/10a	出穂25～10日前まで	湛水散布
スマレクト粒剤		2～3kg/10a	出穂7～20日前	
ビビフル粉剤DL		3～4kg/10a	出穂10～5日前	散布
ビビフルフロアブル		75～100ml/10a (散布液量50～150ℓ)	出穂10～2日前	茎葉散布

※散布に当たって粒剤は3～5cmの水深を保ち散布ムラや重複散布に注意して下さい。

※粉剤・フロアブル剤についても、近隣の農作物に飛散しないよう注意し散布して下さい。

⚠️畦畔等の除草剤散布にあたって

畦畔や農道等へ除草剤を散布する際に対象雑草以外の作物へ薬剤がドリフト（飛散）する場合があります。

散布前に立地、風（風向と強弱）を考え、ドリフト（飛散）にも配慮した散布計画を立ててから作業をしてください。

また、散布する際は早朝や夕方の風のない時間帯を選ぶよう心がけましょう！

なお、薬剤の使用にあたってはラベルを一読し、使用方法等を確認の上、散布して下さい。



《平成26年産『環境保全米』展示圃場施肥体系・生育状況》

調査日 平成26年6月20日

地区	圃場所在地	面積	品種	基肥 (10a当たりの肥料成分)					田植日	草丈 (cm)		㎡当たり 茎数				
				肥料名	施用量	N	(うち化学成分)	P		K	本年	25年参考	本年	25年参考		
関上(除塩)	牛野字松浦	35a	ひとめぼれ	高度化成555	40kg	2.0	2.0	10.0	10.0	5月11日	40.3	—	246.7	—		
下増田	杉ヶ袋字高原	30a	ひとめぼれ	特別栽培米基肥追肥兼用肥料	40kg	4.0	2.0	1.6	4.0	5月10日	39.8	43.4	289.3	438.9		
館腰	植松字北	60a	ひとめぼれ	まーくん有機209	50kg	6.0	3.0	5.0	4.5	5月14日	42.4	37.9	431.7	260.7		
愛島	北目字田小屋	100a	ひとめぼれ	一発有機209	50kg	6.9	3.0	5.0	4.5	5月25日	36.5	—	311.6	—		
増田	手倉田字堰根	16a	つや姫	苗箱まかせNK301(60日) 苗箱まかせNK301(100日)	各5.4kg	3.2	3.2	0	1.1	5月14日	41.5	—	190.7	—		
玉浦(除塩)	寺島字瀬崎	86a	ひとめぼれ	らくだ君有機一発499	45kg	6.3	3.2	4.1	4.1	5月15日	35.6	—	273.1	—		
順調な生育をしており、6月下旬に入り茎数が確保されております。中干し作業を行い、有効茎確保に努めてください。											当管内環境保全米展示圃平均		39.4	44.2	290.5	331.0